

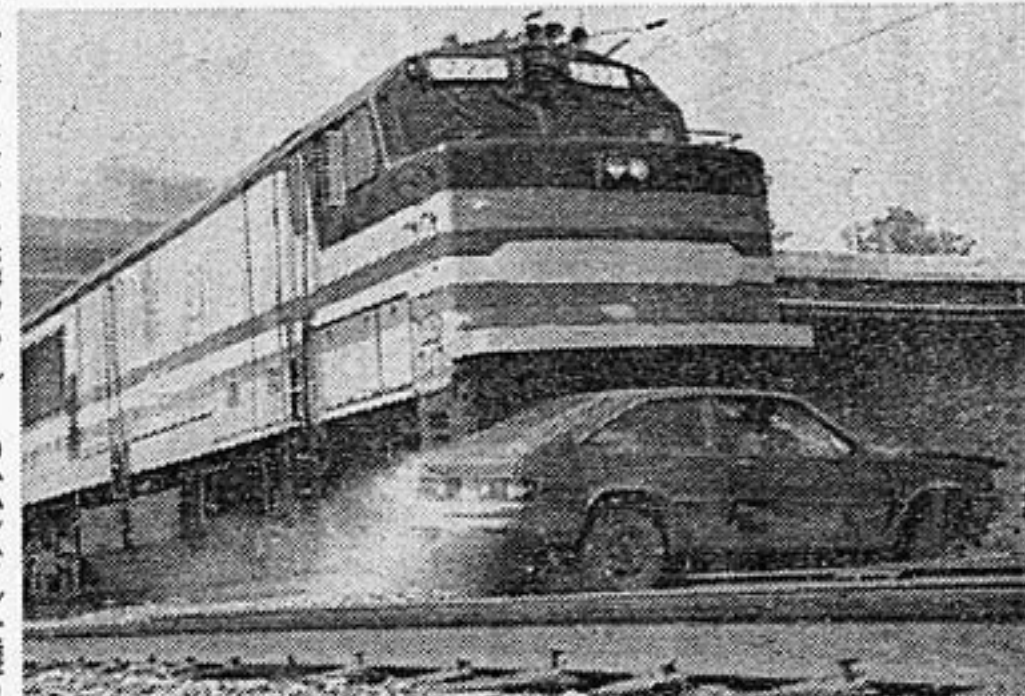


♡♡♡①

米・ロサンゼルス
6年在住体験

平木 博美

砂漠の中で 車の事故



米国では踏切事故も多い（写真は事故防止を呼びかけた全米鉄道旅客公社が行ったデモンストレーション）

一九八九年十月九日、コロンブスのアメリカ到達を祝う三連休を利用して、グランドキャニオン国立公園を訪れていた私たち家族は、砂漠の中を真っすぐに走る4番フリーウエーを家へ向け西進していた。

前日から体調を崩していた主人は運転するのにもつらく、残る八時間の道程は一人で運転して帰ろうとホ

テルを出発して約一時間。突然、運転席の真下のタイヤが落ちたように感じられた。何が起きたのか訳がわからないまま、スピンを避けるためブレーキを踏まず、情性で車が道路上で止まってくれることを祈りつ

フリーウエーで突然左の前輪が下がり

路肩から斜面を横転

つ、ハンドルを握りしめた。しかし、左前輪が下がった状態で車は直進しないし、方向を変えようにもハンドルも完全にロックされていた。

路肩まで車が到達した途端、車は砂の斜面を転がり始めた。一回、二回と横転する間に車の窓は次々に割れ、大声で叫んでいる私の口の中に、ガラスの破片が砂と一緒に飛び込んできた。車の横転を止めたいと思うが、人間一人の細腕では不可能な話。三回転して、ようやく砂の上に止まった。

から引っぱり出して、みる。香織のよこへ行ってきて、あまりの外傷のひどさに息をのむ。気が付くと、数台のキャンピングカーや乗用車が止まって、人が降りてきて助けてくれる。キャンプによく出かける人たちは、砂漠の中で事故に遭う怖さを知っていたのだから、救急車も呼べないのだ。大げな動かしなさいよう指示してくれる人、顔だけはふいてやるよう水とタオルをくれる人、車の中から荷物を出してくれる人、事故車のエンジンから煙が出てきたので消火してくれる人、子供をあやしてくれる人、多くの人が動き回って、私を助けてくれる。私はなぜかほろりと立ちつくしていた。

十五分もたったころ、ハイウエーパトロールの女性警官が来て、応急処置を始めた。止血しながら、パトロールは三時間に一度だから少しずれていたら救急車も呼べなかつたと話す。そして、無線でヘリコプターの救急隊を呼んでくれた。そこへ、救急車(ambulance)が来て二人の隊員が降りてきた。警官が驚いて尋ねると、対向車線を空車で病院へ戻るところだったので、中央分離帯を乗り越えて来てくれたのだった。

砂漠の中の事故では、近くの町まで走って電話をしなければならぬ限り、助けも呼べないことを思えば、私たちは幸運だったと言える。ときはきと香織を担架に乗せて、救急隊員は私にも同乗するよう命じて、病院に向けて出発した。

監修

小木曾道子

ほうり出された娘が重傷

通りがかりの人々の助けで病院へ

車内を見渡すと香織だけがない。大声で叫ぶと、外から泣き声が聞こえる。ドアを開けて外へ出ようとするが、すべてゆがんでいて開けられない。主人が壊れた窓から飛び出して香織を探しに走る。そして戻って、顔をガラスの破片で切っている研太郎とチャイルドシートのお陰で無傷の英理子の二人に続いて私も懸

グランドキャニオン——ここを訪れ、この写真を撮影した3日後に平木さんの家族は事故に見舞われた

